土佐日記

阿倍仲麻呂　―　現代語訳　―

十九日。天気が悪いので、船を出さない。

二十日。（天気が）昨日と同じようであるので、船を出さない。皆々は、心配し嘆いている。辛く不安なので、ただ、日が過ぎる数を、今日で何日、二十日、三十日と数えると、（数が多すぎて）指を痛めてしまうに違いない。実に悲しい。夜は眠れもしない。

二十日の夜の月が出たことだ。（ここは都と違い）山の端もなくて、（なんと）海の中から出て来るのだった。このような月を見てのことだろうか、昔、阿倍の仲麻呂といった人は、唐土へ渡って、（日本に）帰って来（ようとし）た時に、船に乗るはずの所で、あちらの国の人が、送別会をして、別れを惜しんで、あちらの漢詩を作りなどしたということだ。（それでもなごりが尽きず）満足できない（ように思った）のだろうか、二十日の夜の月が出るまで（そこにとどまって）いたのだそうだ。その月は（やはり）海から出たという。これを見て、仲麻呂殿は、「私の国ではこのような歌を、神代から神様もお詠みになり、今では（身分の）上中下の（どんな）人でも、このように別れを惜しんだり、喜び事があったり、悲しみがあったりする時には詠むのだ。」といって、詠んだという歌は、

青海原……（青々とした大海原のはるかかなたの空を見渡すと、《ちょうど今上ってきたあの月は》春日にある三笠山の上に出た月《と同じ月》なのだなあ。）

と詠んだのだそうだ。あちらの国の人は、（この歌を）聞いても（言葉が違うので）分かるまいと思われたけれども、歌の意味を、漢字で概略を書き出して、こちら（日本）の言葉を習得している人に話して聞かせたところ、意味を理解（することが）できたのだろうか、まったく意外なほど（感心して）誉めたということだった。唐土とこの（我が）国とは、言葉は違うものなのだが、月の光は同じであるはずだから、人の感情も同じことなのであろうか。

さて、今、当時を想像して、ある人が詠んだ歌、

都にて……（都で山の端に見た月であるが、（海上の今は）波から出てまた波に入ってゆくことよ。）